

宿題より大切な宝物

校長 米村 圭史



もうすぐ子供たちが心待ちにしている夏休みがやってきます。学校では「あと何日で夏休みですか」と子供たちに毎日のように聞かれます。その表情からは、海や川、虫捕り、家族との時間など、たくさんの楽しみへの期待が伝わってきます。

一方で、子供たちにとって夏休みと切り離せないものがあります。「宿題」です。

今からずいぶん昔、小学6年生だった私は、夏休みの自由研究に何をしたらよいか分からず困っていました。工作は苦手、絵も得意ではありません。何日も悩み続けていたある日、父に連れられて鹿児島市の史跡巡りへ出かける機会がありました。そこで訪れたのが、城山や西郷隆盛洞窟、鶴丸城跡、そして加治屋町の史跡でした。当時の私は、正直なところ歴史にはあまり興味がありませんでした。しかし、父は一つ一つの史跡の前で足を止めながら話してくれました。

「ここには昔、西郷さんがいたんだよ。」「歴史というのは、特別な人だけがつくるものではなく、毎日を懸命に生きた人たちの積み重ねなんだ。」私は半分聞き流しながら歩いていましたが、不思議なことに、この父の言葉だけは心に残りました。

その後、自宅へ帰ってから自由研究として見学した史跡についてまとめることにしました。写真を貼り、感じたことを書き、地図も描きました。決して立派な研究ではありませんでしたが、自分で見て、自分で感じたことを一生懸命にまとめました。新学期が始まり、作品を提出した時、担任の先生が私にこう声をかけてくださいました。「よく調べたね。でも先生が一番うれしかったのは、最後に書いてあった感想だよ。」

「昔の人も、自分の町や家族のために頑張っていたことが分かりました。僕も頑張れる人になりたいです。」私は感想にこんなことを書いていました。今振り返ると、先生が褒めてくださったのは研究そのものではなく、その体験を通して少しだけ成長した私自身だったのだと思います。（感想は父の言葉を引用しただけなのですが・・・）

夏休みの宿題とは、問題集を終わらせることや作品を作ることだけが目的ではありません。家族と話をすること。地域を歩くこと。自然を観察すること。おじいちゃん、おばあちゃんから昔話を聞くこと。そして、自分の心が動いた瞬間を見つけること。そうした経験こそが、本当の学びとして子どもたちに残っていくものではないでしょうか。

本校の子供たちは、大きな学校にはない素晴らしい環境の中で育っています。地域の皆様は子供たち一人一人の顔と名前を知り、温かく声をかけてくださいます。畑では季節の野菜が育ち、空を見上げれば広い青空が広がり、夜には都会では見られないほど美しい星々が輝いています。私たち大人には当たり前風景も、子供たちにとってはかけがえのない教材です。

今年の夏休みは、地域の中でしか学べない「心の宿題」に出会ってほしいと願っています。家族の優しさに気付くこと。誰かの苦勞を知ること。地域の歴史や文化を学ぶこと。そして、自分が多くの人に支えられて生きていることを感じる。そうした学びは一生の宝物になります。

今、子供たちを見ていると、一人一人が未来の歴史、星原の未来をつくる存在だと感じます。どんなに小さな一歩でも、その積み重ねがやがて地域を支え、社会を支える力になっていくはずです。

地域の皆様には、日頃より本校の教育活動を温かく見守っていただき、心より感謝申し上げます。この夏も、子供たちが地域の中で多くの人と出会い、多くのことを学び、多くの優しさに触れながら成長してくれることを願っています。ひと回り大きくなった心と、たくさんの思い出と、未来へ向かう自信です。その成長を、保護者の皆様、地域の皆様とともに喜び合える夏になることを願っています。どうぞ子供たちへの変わらぬ温かい声かけと見守りをよろしくお願いいたします。